

日本ポリグル (水質浄化剤の販売)

浄化剤で給水と雇用創出を両立

日本の伝統食、納豆のネバネバ成分であるポリグルタミン酸。これを主成分とする水質浄化剤が、途上国の水不足解消に役立てられている。仕掛けたのは大阪市に本社を置くベンチャー企業、日本ポリグルだ。

同社の浄化剤は道頓堀川の水質を改善するために開発が進められたが、現在では工業用途のほか、バングラデシユにおける水問題の解決、アフリカではソマリアの難民キャンプやタンザニアの農村部におけるNGO(非政府組織)や日本政府などの給水活動に使われ始めている。技術を核に、積極的に政府機関やNGOに対して連携を働きかける日本ポリグルの試みは、官民連携による途上国支援のモデルケースとして、国際支援に携わる関係者らの注目を集めるようになってきている。

1リットル当たり0.1円で浄化

「見ててください。ほら、水がほとんど透明になっていくでしょ」

大阪府中央区の間屋街にある日本ポリグルの本社を訪ねると、小田兼利会長はまず、大阪府内の池から汲んできた淡い黄褐色の水に浄化剤を加え、浄化の手順を実演して見せてくれた。

ガラス棒で攪拌した水を布でろ過すると、小田会長は「大腸菌や砒素だつて除去できるんです」と言いながら、ピーカーの水をおいしそうに飲んで見せた。鉄分を含む浄化剤を使えば、磁石によって不純物を引き寄せることで、水を漉さなくてもきれいな水にすることができるといふ。大阪府内の大手機械メーカーの出身で、発明家でもある小田会長が重視するのは、「論より証拠」。途上国支援に関する講演会や、現地での住民向け説明会の場でも、必ずこのパフォーマンスを見せて、聴衆の心を掴むようにしている。

水を浄化するには様々な手法が存在するが、日本ポリグルの浄化剤の長所は、なんと言ってもコストの安

TANZANIA



さだ。1トン(1000リットル)の水を浄化するのに必要な浄化剤はわずか100グラム。100グラムの浄化剤は日本からアフリカまでの輸送費を含めても100円程度で用意できる。つまり、1リットルあたり0.1円のコストで、沼地や井戸の水を浄化することができるのだ。

2009年に経済産業省の公募事業に採択されたバングラデシユでは、浄化剤の販売や集金を「ポリグルレデイ」と呼ぶ現地の女性らに委託することで、水問題の解決と雇用創出

を両立するビジネスモデルを確立した。小田会長はアフリカにおいてもバングラデシユのノウハウを生かし、浄化装置の運用や浄化水の販売を通じて、現地の雇用を創出する考えだ。

小田会長はアフリカにおける雇用の問題点について、「働いている人の給与が割高であることだ」と指摘する。労働市場のメカニズムが十分に機能しておらず、就業率が低迷している一方で、いったん職に就けば高額所得を得られてしまったため、「賄賂などの不正が後を絶たず、健全な

小田兼利会長は水を浄化して見せてくれた。この技術をアフリカにも展開する

「勤労意欲が育たない」のだと言う。

水を、どの家庭でも月に2ドル（約

相場に比べると、浄化装置の運用や

対する熱意を持った若者らを育成す

タンザニアなどで計画する給水事

2000円）以下で入手できるように

浄化水の販売に携わる人材の所得は

ること、労働市場の改善にもつな

業では、毎日20リットルの衛生的な

するのが目標だ。現在の現地の賃金

大幅に低くなる見込みだが、仕事に

げる考えた。